2025 年度 新課程での最初の大学入学共通テストを終えて

「高校数学・新課程を考える会」事務局長／予備校講師　大淵智勝
学びエイド 鉄人講師　塚本有馬

１．はじめに

2025 年度の大学入学共通テスト（以下，共通テスト）は共通テストとなって５回目ではあるが，新課程下としては初の実施となった。新課程特有の分野に関しては，事前に試作問題が公表されており，本試験において，試作問題のとおりの問題の出題もみられた。

また，2025 年度入試は，旧課程移行措置が存在する中で行われたこともあり，2026 年度以降で変化していく可能性も十分に考えられる。

今回は，これらのことを中心に 2025 年度の共通テストの出題について見ていきたい。

２．2025 年度共通テスト・得点の傾向

【数学ⅠA】

受験者数については，2024 年度に比べると約３万人減少しているが，旧課程の数学 IA の受験者数が 36,274 人であるので，2025 年度の方が数学 IA の受験者は合計では多くなっていることとなる。

ここ５回のうち，「センター試験時代を含めて過去最低平均点」だった 2022 年度のものを除いた４回は，平均点が５割台に収まっており，2025 年度の平均点はその４回の中では下から２番目となっている。

年度	受験者数（人）	平均点（点）
2021（第１日程）	356,493	57.68
2022	357,357	37.96
2023	346,628	55.65
2024	339,152	51.38
2025	308,344	53.51

細かい得点分布を見ていくと，第１四分位数，中央値については，平均点と同じ順で，低い方から順に，2022 年→ 2024 年→ 2025 年→ 2023 年→ 2021 年となっている。一方，第３四分位数になると，2023 年と 2025 年がほぼ同じ値となり，第３四分位数よりも上では累積相対度数グラフが左から順に 2022 年→ 2024 年→ 2023 年→ 2025 年→ 2021 年となり，この層では 2023 年よりも 2025 年の方が得点しやすかったことになる。

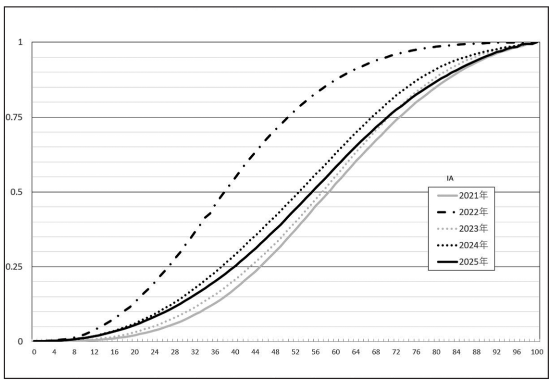

図1　数学ⅠA・2021 ～ 2025 年の累積相対度数

新課程になり，共通テストの数学 IA はすべてが必答問題となった。2025 年度の問題の区分けと分野，配点は以下のようになっている。

第１問（30 点）
[1] 数と式，集合と命題（10 点）
[2] 図形と計量（三角比）（20 点）
第２問（30 点）
[1] ２次関数（15 点）
[2] データの分析（15 点）
第３問 図形の性質（20 点）
第４問 場合の数と確率（20 点）

2024 年度の数学 IA(旧課程) と比べると，数学Ⅰの分野 (第１問・第２問) の中問の区切り方とそれぞれの分野の配点は同じであり，数学 A の部分については，旧課程の「整数の性質」の選択問題がなくなり，「図形の性質」，「場合の数と確率」が旧課程と同じくそれぞれ 20 点ずつの配点で必答問題になったという形になった。

このため，旧課程を含めた過去８年 (旧課程下でのセンター試験と共通テスト) の大問別の正答率とノーマーク率 (無解答率) の最小値と最大値 (それぞれ％) を，比較することができ，その表は以下のようになっている。

＜第１問＞

年度	正答率 (%)	ノーマーク率 (%)
2018	30.5-96.4	0.7-34.0
2019	40.7-99.0	0.2-23.3
2020	18.4-95.5	0.5-44.9
2021	36.5-97.8	0.1-4.5
2022	13.8-90.9	1.8-51.9
2023	9.1-97.2	0.3-49.7
2024	7.1-86.9	0.6-38.8
2025	19.1-91.8	0.4-19.3

＜第２問＞

年度	正答率 (%)	ノーマーク率 (%)
2018	6.5-94.5	0.5-34.9
2019	17.4-93.4	0.4-32.1
2020	12.7-91.8	1.1-30.7
2021	39.9-93.8	0.5-18.5
2022	10.4-76.1	2.3-19.2
2023	18.1-95.4	0.4-28.3
2024	6.7-98.4	0.4-33.4
2025	13.4-81.4	0.9-21.0

＜第５問→第３問 (図形の性質) ＞

年度	正答率 (%)	ノーマーク率 (%)
2018	31.7-88.6	1.0-26.5
2019	12.6-88.1	0.6-46.7
2020	32.3-92.5	0.6-23.5
2021	9.5-86.3	0.7-32.3
2022	0.9-72.7	1.9-64.2
2023	14.9-87.6	1.0-36.8
2024	17.1-78.4	0.5-15.6
2025	15.0-86.0	0.7-17.1

＜第３問→第４問 (場合の数と確率) ＞

年度	正答率 (%)	ノーマーク率 (%)
2018	15.4-95.4	0.1-38.4
2019	6.7-89.3	0.5-72.2
2020	8.5-95.4	0.7-17.8
2021	20.4-85.3	0.3-38.7
2022	2.9-98.2	0.3-62.7
2023	13.9-89.6	0.2-27.5
2024	7.2-82.4	0.6-43.1
2025	21.6-92.0	1.6-28.6

2025 年度は，他年度に比べて全体的に，ノーマーク率の最大値も低く，正答率の最小値もそこまで低くはない。ノーマーク率が低いということは，比較的多くの受験生がすべての問題に手を付けられたということであるので，共通テストで文章量が増えたことによる「時間が足りない」という問題は，だいぶ改善されたといえる。

【数学 ⅡBC】

IIBC についても，受験者数は 2024 年度と比べて約２万７千人減少しているが，旧課程の IIB の受験者数が 32,182 人であるから，2025 年度の方が数学 IIB・IIBC の受験者は合計では多くなっていることとなる。

共通テストになってからの５回において，数学 IIB・IIBC の平均点は，「センター試験時代を含めて下から３番目」に低い平均点となった 2022 年のものを含めて，低い順に 2022 年→ 2025 年→ 2024 年→ 2021 年→ 2023 年という並びになる。

年度	受験者数 (人)	平均点 (点)
2021 (第１日程)	319,697	59.93
2022	321,691	43.06
2023	316,728	61.48
2024	312,255	57.74
2025	285,563	51.56

しかし，細かい得点分布を見ると，上位１割においては低い順に 2022 年→ 2024 年→ 2025 年→ 2023 年→ 2021 年，第３四分位数では低

い順に 2022 年 → 2025 年 → 2024 年 → 2023 年 → 2021 年，中央値では 2022 年 → 2025 年 → 2024 年 → 2023 年 ≒ 2021 年，第 1 四分位数では低い順に 2022 年 → 2025 年 → 2021 年 ≒ 2024 年 → 2023 年となっている。さらに下位 15% においては，2025 年がこの 5 年の中で最も点が取りにくいものとなっている。つまり，2025 年の問題は，上位層にとっては「過去 5 回で，ちょうど真ん中くらいに点が取りやすかった問題」であり，中位層にとっては「2022 年程ではないが，それ以外の 4 回の中で元も点が取りにくかった問題」であり，下位層にとっては「過去 5 回で最も点が取りにくかった問題」である，学力層によって感触が変わる問題であったといえる。

このことに関して，2025 年度の共通テスト・数学 IIBC の問題作成部会の見解において，自己評価の最初に高等学校教科担当教員からの評価として「学びの質によって差がつきやすい良問」が取り上げられている。(具体的には，第 1 問 (1) の (iii) と (2)，第 2 問の空欄サシ，第 3 問 (2) の (iii)，第 6 問 (3)，第 7 問 (3)) これらの問題を中心に，学力層によって得点差がついたことから，上記のような「学力層によって感触が変わる問題」となったのだと考えられる。

なお，例年，累積相対度数を記事に載せてもらっているが，これは，平均点の変動だけでは共通テストの年ごとの難易度を語りきれないためである。例えば，国公立大学を受験することを考えた場合，毎年共通テストを受験して国公立大学へ入学する受験生は約 13 万人であり，2025 年度の数学 IIBC の受験者は上表のように約 31 万人であるから，年ごとの共通テストの難易度については中央値よりも上側の部分を参考にすることとなる。例えば，国公立大学を目指す受験生が，「共通テストの過去 5 回の問題を得点が取りやすい順に解く」というのであれば，第 3 四分位数の高い順あたりを考え，2021 年 → 2023 年 → 2024 年 → 2025 年 → 2022 年の順に解けばよいということになる。

また，国公立大学でも難関といわれる大学については，第 3 四分位数よりも上，最難関といわれる大学については，上位 1 割の得点分布を参考にすることとなる。

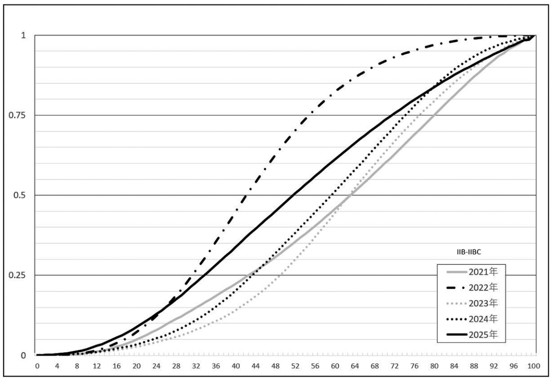

図 2　数学 ⅡB → ⅡBC・2021 〜 2025 年の累積相対度数

新課程になり，数学 IIB から数学 IIBC となった。また，選択大問が 3 から 4 に増えた。2025 年の問題の区分けと分野，配点は以下のようになっている。

(必答問題)
第 1 問 三角関数 (15 点)
第 2 問 指数関数と対数関数 (15 点)
第 3 問 微分法と積分法 (22 点)
(選択問題：4 大問中 3 大問選択)
第 4 問 数列 (16 点)
第 5 問 統計的な推測 (16 点)
第 6 問 ベクトル (16 点)
第 7 問 複素数平面と式と曲線 (16 点)

2024 年以前の旧課程における数学 IIB と比べると，数学 II の分野については，三角関数，指数関数と対数関数の配点は変わらず，微分法と積分法の配点が 8 点減ったことになる。また，数学 B の「数列」「統計的な推測」，数学 C の「ベクトル」「複素数平面と式と曲線」の 4 つから 3 つを選ぶ形式になり，旧課程では数学 B の 1 つの分野で 20 点の配点だったのが，各大問の配点が 16 点ずつと圧縮された。一方，数学 BC の選択大問の合計配点は 48 点と 8 点増えたこととなる。

大問別の正答率とノーマーク率（無解答率）の最小値と最大値（それぞれ％）は次のようになっている。（大問が旧課程と同じ分野となっているものについては，過去８年分とも比較をしている。）

＜第１問：三角関数＞

年度	正答率（%）	ノーマーク率（%）
2025	24.3-85.5	0.4-21.0

＜第２問：指数関数と対数関数＞

年度	正答率（%）	ノーマーク率（%）
2025	17.1-91.7	0.4-19.1

＜第２問→第３問：微分法と積分法＞

年度	正答率（%）	ノーマーク率（%）
2018	5.3-94.0	1.1-58.8
2019	11.4-90.6	1.0-61.1
2020	7.9-93.0	1.5-59.6
2021	35.6-95.5	0.3-37.7
2022	7.9-72.3	2.3-50.6
2023	39.9-95.6	0.4-24.0
2024	19.9-94.6	0.4-8.5
2025	35.8-96.6	0.3-6.4

＜第３問→第４問：数列＞

年度	正答率（%）	ノーマーク率（%）
2018	9.1-80.6	3.4-57.8
2019	2.0-81.7	0.8-78.6
2020	8.5-92.7	0.5-52.7
2021	36.1-97.0	0.1-16.8
2022	1.3-91.4	1.2-52.4
2023	36.8-90.5	0.4-34.2
2024	24.1-95.3	0.3-11.9
2025	9.7-80.9	0.5-27.7

＜第５問：統計的な推測＞

年度	正答率（%）	ノーマーク率（%）
2025	18.7-68.7	1.1-17.8

＜第４問→第５問→第６問：ベクトル＞

年度	正答率（%）	ノーマーク率（%）
2018	10.4-96.0	0.5-59.3
2019	8.5-88.0	0.7-56.5
2020	6.3-90.5	0.7-63.5
2021	20.1-77.3	1.1-14.9
2022	3.8-95.0	2.1-52.0
2023	16.3-96.7	0.4-10.6
2024	4.4-92.5	0.6-61.1
2025	23.8-89.0	0.7-16.3

＜第７問：複素数平面と式と曲線＞

年度	正答率（%）	ノーマーク率（%）
2025	26.4-95.3	0.5-10.4

数学 IA においてもそうであったが，ノーマーク率の最大値が過去のものと比べるとそこまで高いわけではないので，試験時間が 70 分となったこともあるが，数学 IIBC においても，「時間が足りない」という問題が改善されたと考えることができる。ただ，ノーマーク率の最大値がそこまで高くなくなったのには，「解答群から選ぶ問題」が増えたこともある。過去のセンター試験などにおいて，ノーマーク率が５割を超え，正解率が５％程度になるような問題は，大問の最後の方にある数値を答えさせる問題であった。これが，大問の最後の方の問題であっても「解答群から選ぶ問題」となったため，「とりあえず，選んでマークする」ということが可能となり，ノーマーク率が下がったとも考えられる。（このような傾向は，英語などにおいても見られる）

ただし，正答率の最小値がそこまで低くはないということからすると，受験生としてはしっかりと考えたり計算したりして選んでいるということにもなる。

３．新課程特有の出題

ここでは，新課程となって教科書に載るようになったことが問われた問題を見ていく。

【数学 IA】

まず，数学 IA においては，データの分析において「仮説検定の考え方」が新課程になって加わり，これについては試作問題と同様な形式のものが本試験において出題された。

確率は数学 A の分野であるため，仮説検定で用いられる正規分布に相当するものを「コインを投げたときの表の枚数の割合」としており，また，「対立仮説」「帰無仮説」「有意水準」といった

言葉も使わないようになっている。

一方，追試験ではこの「仮説検定の考え方」は出題されておらず，代わりに，「散布図内に，いくつかの集団があるときの相関係数」についての出題があった。

第２問〔2〕

(3)　太郎さんと花子さんは，散布図においていくつかの集団があるときの全体の相関係数について関心をもち，簡単な例で考えることにした。

変量 x，y の値の組

$$(-1,\ 1),\ (1,\ -1)$$

を考える。このとき，相関係数は－１となる。

この二つの値の組に，$(-2,\ 0)$，$(0,\ -2)$ と $(0,\ 2)$，$(2,\ 0)$ を加えた，合計六つの値の組を，データ W と呼ぶことにする。また，データ W の x，y の平均値をそれぞれ $\overline{x}$，$\overline{y}$，分散をそれぞれ $s_x{}^2$，$s_y{}^2$，共分散を s_{xy} とする。

データ W と x と y の相関係数を r_{xy} とし，この r_{xy} について考えよう。なお，必要に応じて，次に示す表１の計算表を用いて考えてもよい。

表１　計算表

x	y	$x-\overline{x}$	$y-\overline{y}$	$(x-\overline{x})(y-\overline{y})$
-1	1			
1	-1			
-2	0			
0	-2			
0	2			
2	0			

(i) $\overline{x}=\boxed{ソ}$，$s_x{}^2=\boxed{タ}$，$s_{xy}=\boxed{チ}$ である。

$\boxed{ソ}$ の解答群

⓪ 0　① 1　② 2　③ 3　④ $\frac{1}{2}$

⑤ $\frac{4}{3}$　⑥ $\frac{3}{2}$　⑦ $\frac{5}{3}$　⑧ $\frac{11}{6}$　⑨ $\frac{5}{2}$

$\boxed{タ}$ の解答群

⓪ $\frac{7}{6}$　① 1　② 2　③ 3　④ $\frac{4}{3}$

⑤ 5　⑥ $\frac{3}{2}$　⑦ $\frac{5}{3}$　⑧ $\frac{11}{6}$　⑨ 10

$\boxed{チ}$ の解答群

⓪ 0　① 1　② $-\frac{3}{2}$　③ -1　④ $-\frac{1}{2}$

⑤ $-\frac{1}{3}$　⑥ $\frac{1}{3}$　⑦ $\frac{1}{2}$　⑧ $\frac{3}{2}$

(ii)　$s_x{}^2=s_y{}^2$ であることに着目すると，

$r_{xy}=\boxed{ツ}$ となることがわかる。

$\boxed{ツ}$ の解答群

⓪ 0　① $-\frac{2}{3}$　② $-\frac{1}{2}$　③ $-\frac{1}{5}$　④ $-\frac{1}{6}$

⑤ $\frac{1}{6}$　⑥ $\frac{1}{5}$　⑦ $\frac{1}{2}$　⑧ $\frac{2}{3}$

（2025 年度　大学入学共通テスト追試験　数学 IA）

この (3) の前までは運動能力について，小学五年生男子と中学二年生男子について調べているのだが，これらの２つの集団を同じ散布図に入れたときと，別々の散布図にしたときの話を扱っている。この件について，２つの異なる集団を一緒にしたときを，簡単な値となっているデータを用いて検証をしているのが (3) となっている。

第４問の場合の数と確率の分野では，新課程になってから教科書に再び載るようになった「期待値」についての出題がある。

共通テストで常に掲げていた,「日常生活に数学を落とし込んでいく問題」を，ここでは「期待値を用いて，参加料金の設定が妥当かどうかを判断する問題」として出題している。なお，第２問〔1〕の２次関数でも，噴水の形が２次関数のグラフとなっていることを用いた問題であり，問題作成部会の見解の文言を用いると「日常生活における事象の特徴を捉えて数学的な表現を用いて表現する」問題となっている。

【数学 IIBC】

第５問の「統計的な推測」においては，試作問題の通りに「仮説検定」について，本試験で出題されていた。こちらは数学 IA 第２問〔2〕と異なり，確率分布としては正規分布を用い,「帰無仮説」「対立仮説」「有意水準」といった言葉も用いられている。一方，追試験では「仮説検定」は出題されず,「くじの設定」が妥当だったのかを信頼度 95％の信頼区間を用いて行う問題となっ

ている。IA，IIBC とも，統計については本試験では「試作問題」の通りに仮説検定を出題しているが，追試験ではそのようになっていない。つまり，来年度以降，必ず仮説検定が出るわけではないということを示唆しているのかとも思われる。

第７問の「複素数平面と式と曲線」において，試作問題では「式と曲線」でマーク数１(配点４点)，「複素数平面」でマーク数５(配点 12 点)となっていたが，本試験では「式と曲線」の範囲の出題がなく，すべて「複素数平面」の問題となっていた。一方で，追試験では一見すべての問題が「複素数平面」に見えるが，複素数平面において，楕円を考える問題となっていた。つまり，「複素数平面」と「式と曲線」の２つの分野を融合させた問題となっていた。

第７問

(1)　複素数平面上で方程式

$$|z-1|+|z+1|=4 \quad \cdots\cdots\cdots\cdots ①$$

を満たす点 z 全体がどのような図形かを考える。

(i)　方程式①は $\boxed{ア}$ が一定であることを表している。

$\boxed{ア}$ の解答群

⓪ 点 z と点 $1-i$ の距離
① 点 z と点 1 の距離と，点 z と点 -1 の距離の和
② 点 z と点 $1+i$ の距離と，点 z と点 $-1-i$ の距離の和
③ 点 z と点 $1-i$ の距離の２乗
④ 点 z と点 1 の距離の２乗と，点 z と点 -1 の距離の２乗の和
⑤ 点 z と点 $1+i$ の距離の２乗と，点 z と点 $-1-i$ の距離の２乗の和

(ii)　x，y を実数とし，$z=x+yi$ とおくと，方程式①は，

$$\sqrt{(x-1)^2+\boxed{イ}^2}=4-\sqrt{\boxed{ウ}^2+y^2}$$

と変形できる。

両辺を２乗して計算すると

$$\boxed{エ}=2\sqrt{\boxed{ウ}^2+y^2}$$

となる。

さらに両辺を２乗して計算すると

$$\boxed{オ}=1 \quad \cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots ②$$

となる。

$\boxed{イ}$，$\boxed{ウ}$ の解答群（同じものを繰り返し選んでもよい。）

⓪ $(x-1)$	① x	② $(x+1)$
③ $(y-1)$	④ y	⑤ $(y+1)$

$\boxed{エ}$ の解答群

⓪ $x+\frac{y}{2}+\frac{15}{4}$	① $x-\frac{y}{2}+\frac{15}{4}$	② $\frac{x}{2}+\frac{y}{2}+\frac{7}{2}$
③ $x+4$	④ $-x-4$	⑤ $\frac{x}{2}-\frac{y}{2}+\frac{7}{2}$
⑥ $\frac{x^2}{2}+\frac{y^2}{2}-\frac{7}{2}$	⑦ $-\frac{x^2}{2}-\frac{y^2}{2}+\frac{7}{2}$	

$\boxed{オ}$ の解答群

⓪ $\frac{x^2}{3}+\frac{y^2}{4}$	① $\frac{x^2}{4}+\frac{y^2}{3}$
② $\frac{x^2}{3}-\frac{y^2}{4}$	③ $\frac{x^2}{4}-\frac{y^2}{3}$
④ $\frac{1}{4}\{(x-1)^2+(x+1)^2+2y^2\}$	
⑤ $\frac{1}{16}\{(x-1)^2+(x+1)^2+2y^2\}$	

(iii)　(i)，(ii) から，複素数平面上で方程式①を満たす点 z 全体は，複素数平面上における $\boxed{カ}$ である。

ただし，複素数平面上で方程式①を満たす点 $z=x+yi$ 全体は，座標平面上で方程式②を満たす点 $(x,\ y)$ 全体と同じ図形であることに注意する。

$\boxed{カ}$ の解答群

⓪ 点 $1-i$ を中心とする半径４の円
① 点 $-1+i$ を中心とする半径４の円
② ２点 1，-1 を焦点とし，長軸の長さが４の楕円
③ ２点 i，$-i$ を焦点とし，長軸の長さが４の楕円
④ ２点 1，-1 を焦点とし，長軸の長さが８の楕円
⑤ ２点 i，$-i$ を焦点とし，長軸の長さが８の楕円
⑥ ２点 $\sqrt{7}$，$-\sqrt{7}$ を焦点とし，２点 $\sqrt{3}$，$-\sqrt{3}$ が頂点の双曲線
⑦ ２点 $\sqrt{7}i$，$-\sqrt{7}i$ を焦点とし，２点 $\sqrt{3}i$，$-\sqrt{3}i$ が頂点の双曲線
⑧ ２点 $\sqrt{7}$，$-\sqrt{7}$ を焦点とし，２点 2，-2 が頂点の双曲線
⑨ ２点 $\sqrt{7}i$，$-\sqrt{7}i$ を焦点とし，２点 $2i$，$-2i$ が頂点の双曲線

(2)　点 z を複素数平面上における $\boxed{カ}$ 上の点であるとし，点 w は，点 z を原点を中心に $\frac{\pi}{4}$ だけ回転した点とする。このとき，点 w が満たす方程式を求めたい。

点 w と点 z は，関係式 $\boxed{キ}$ を満たす。また，点 z は複素数平面上で方程式①を満たす。したがって，点 w は方程式

$$\boxed{ク}=4$$

を満たす。

$\boxed{キ}$ の解答群

⓪ $z=\frac{\pi}{4}+w$	① $w=\frac{\pi}{4}+z$
② $z=\frac{\pi}{4}w$	③ $w=\frac{\pi}{4}z$
④ $z=\cos\frac{\pi}{4}+i\sin\frac{\pi}{4}+w$	⑤ $w=\cos\frac{\pi}{4}+i\sin\frac{\pi}{4}+z$
⑥ $z=\left(\cos\frac{\pi}{4}+i\sin\frac{\pi}{4}\right)w$	⑦ $w=\left(\cos\frac{\pi}{4}+i\sin\frac{\pi}{4}\right)z$

$\boxed{ク}$ の解答群

⓪ $\left|w-\left(1-\frac{\pi}{4}\right)\right|+\left|w+\left(1+\frac{\pi}{4}\right)\right|$

① $\left|w-\left(1+\frac{\pi}{4}\right)\right|+\left|w+\left(1-\frac{\pi}{4}\right)\right|$

② $\left|w-\left(1-\frac{\sqrt{2}}{2}-\frac{\sqrt{2}}{2}i\right)\right|+\left|w+\left(1+\frac{\sqrt{2}}{2}+\frac{\sqrt{2}}{2}i\right)\right|$

③ $\left|w-\left(1+\frac{\sqrt{2}}{2}+\frac{\sqrt{2}}{2}i\right)\right|+\left|w+\left(1-\frac{\sqrt{2}}{2}-\frac{\sqrt{2}}{2}i\right)\right|$

④ $\left|w-\left(\frac{\sqrt{2}}{2}+\frac{\sqrt{2}}{2}i\right)\right|+\left|w+\left(\frac{\sqrt{2}}{2}+\frac{\sqrt{2}}{2}i\right)\right|$

⑤ $\left|w-\left(\frac{\sqrt{2}}{2}-\frac{\sqrt{2}}{2}i\right)\right|+\left|w+\left(\frac{\sqrt{2}}{2}-\frac{\sqrt{2}}{2}i\right)\right|$

(3)　点 z を複素数平面上における $\boxed{カ}$ 上の点であるとし，点 α は，点 z を原点を中心に一定の角 θ だけ回転した点とする。このとき，次の⓪～⑤のうち，θ を適切に定めることにより，点 α が満たす方程式となるのは $\boxed{ケ}$ である。

$\boxed{ケ}$ の解答群

⓪ $|\alpha-1|+|\alpha+1|=6$

① $|\alpha-1|+|\alpha-3|=4$

② $\left|\alpha-\frac{1}{2}\right|+\left|\alpha+\frac{1}{2}\right|=4$

③ $|\alpha-(1+\sqrt{3}\,i)|+|\alpha+(1-\sqrt{3}\,i)|=4$

④ $|\alpha-\sqrt{2}|+|\alpha-\sqrt{2}\,i|=4$

⑤ $|\alpha-i|+|\alpha+i|=4$

（2025 年度　大学入学共通テスト追試験　数学ⅡBC）

複素数平面上での方程式が与えられ，それを座標平面の方程式に変えていくことと，これを回転移動するとどのようになるかが問われていた。まさに，分野横断型の出題となっている。

4．旧課程移行措置の影響

2025 年の入試においては,「旧課程移行措置」が取られており，共通テストにおいては，新旧課程で分野割りや科目名，内容などが大きく異なる教科（数学，情報，地歴公民）については,「旧課程履修者用の問題」が用意されていた。

ところで，これまで何度かあった旧課程移行措置については，個別の大学の入試では「新課程と旧課程の共通範囲からの出題」としていることが多く，今回についてもそのようにしている大学が多かったように見受けられる。このようにする理由として考えられることとしては,「新課程用の問題と旧課程用の問題に難易度の差が生じることがないようにしたい」ということがある。つまり，新旧で別々の問題を作った場合，片方の問題は解きやすく，もう片方の問題が解きにくい問題となる可能性があり，この場合，どちらを選んだかで有利・不利が生じてしまうことになる。このような事態を避けるためには，新旧課程で「共通問題」としてしまうことが最も対処しやすい方法といえる。

実はこのことは共通テストにも当てはまる。2025 年度の共通テストの数学においては，IA，IIBC のそれぞれにおいて，新旧の共通問題は次のようになっている。

＜数学 IA ＞

・第１問 [1]，第１問 [2]，第２問 [1] は新旧共通

・新課程第３問と旧課程第５問が共通

＜数学 IIB と IIBC ＞

・第１問，第２問，第３問は新旧共通

・新課程第４問と旧課程第６問が共通

・新課程第６問と旧課程第７問が共通

このため，とりわけ数学 IA については「すべてが必答問題」になったにもかかわらず，旧課程の問題から「整数の性質」を外し，場合の数と確率の問題，データの分析の問題を新課程に対応したものに変えたという形になり，問題の配置に対する目新しさがみられなかった。しかし，過去のセンター試験で数学 IA が全問必答であったとき，数学Ⅰの「図形と計量」(三角比)と数学Ａの「図形の性質」を融合させた大問が存在していた。旧課程移行措置を考える必要がなくなる来年度以降，このような分野横断の大問が用意される可能性はある。

また，過去に，数学Ⅱの内容を数学Ｂの選択問題の中で問われたことがあった。共通テストではより一層,「分野横断」を問いたいので，数学 IIBC においても，数学Ⅱの内容が，数学ＢやＣの選択大問内で問われることも十分に考えられる。